

29 隋唐时期脈状記載との比較による二十四脈

四脈状の検討

中川 俊之

I 緒言

中国伝統医学には幾つかの診断法が有る。中でも脈診は最も重要なものである。脈診の発生時期はほとんど想像に頼るのみであるが、その始めは基準となる言葉（「脈状」）の創作にあつたと思われる。脈は拍動するのみであり、何らかの基準無しでの分別は不可能である。

浮沈や遅数という基準により脈の位置や速度が意識されるのである。これら脈状は病態把握の体系化に随い、体系的な記載に移行する。脈状の体系化は、『脈経』巻第一冒頭の二十四脈状を一つの頂点とし、以後、二十四脈状を規範として、脈診の体系は変遷する。従って、中国伝統医学における脈診の研究は、先ず二十四脈状の体系を理解する必要がある。本発表では、二十四脈状と体系

の類似する隋唐期の脈診記載を比較資料とし、二十四脈状の体系を分析する。

II 二十四脈状と他脈状記載との比較

二十四脈状は、『脈経』巻第一・脈形状指下秘訣第一に見える総字数二四〇字の記載を指す。二十四種の脈状説明と、それらを相類で分類した八対十六脈状が記載される。また、記載順に浮脈から緊脈までを陽脈、沈脈以下を陰脈に分けることも可能である。脈状説明は例外を除き、脈状のみの記載であり脈證は無い。『脈経』と近い時期の成立とされる敦煌文書には、二十四脈状と体系が類似する記載が散見する。

『亡名氏脈経第二種』では、十九脈状が記載され、脈状名もほぼ二十四脈状と一致する（革脈が牢脈となっている）。十九種の脈状は、九対十八脈の相類脈状と細脈で構成される。十九脈状の他に、「別有四種…得此者死」として予後不良の四脈状を設定するが、二十四脈状に見える促散結代動の何れかであろう。

『平脈略例』甲本（S五六一四）は、寸関尺の部位毎

に十九脈状と脈證が記載される。脈状の順序は相類を窺わせるものであり、『亡名氏脈經第二種』とほぼ一致する。

『玄感脈經』は、「脈名↓脈の陰陽↓脈状↓名曰〇也」という体例で、二十三種の脈状（六種の陽脈と、十七種の陰脈）を列記する。相類による分類は見えない。二十四脈状に見える洪脈、數脈、散脈を除き、革脈と牢脈、濡脈と軟脈を分けて記載する。二十四脈状が陽脈と陰脈に分かれる構造に似るが、細部に違いが有る。

敦煌文書との比較から、二十四脈状は十九脈状を核とし、これに促散結代動の五脈状を加えて構成されていることが理解される（四脈状が五脈状になった理由は不明）。敦煌文書では、十九脈状とそれ以外の脈状が、病脈と死脈に分離されているが、二十四脈状では、相類か関連脈状として全て相類の中に組み込んでいる。

二十四脈状の脈状説明を列記する方法は、後代における脈状記載の規範となる。後代の脈状記載の内、特に隋唐期までの記載は、二十四脈状からの変遷を知る上で重要である。従って、発表では上記敦煌文書の他に、『脈

訣』（『脈訣』引用とされる敦煌文書含む）、『黄帝内經太素』楊上善注、『難經集注』（呂広注、楊玄操注）、『素問』王冰注、『千金方』、『千金翼方』、『太平聖惠方』の脈状記載を比較資料とし、二十四脈状を検討する。

（日本鍼灸研究会）